

1. 酪農家における牛ウイルス性下痢・粘膜病の発生と 清浄化に向けた地域包括型対策

大分家畜保健衛生所

○寺山将平・(病鑑) 河野泰三・手島久智・病監 中出圭祐

【はじめに】0市の搾乳牛130頭規模の酪農家において、2018年6月に診療獣医師から難治性腸炎で予後不良と判断された子牛1頭の病性鑑定依頼があり、牛ウイルス性下痢・粘膜病(BVD-MD)の持続感染牛(PI牛)を摘発してPI牛まん延防止対策と、市および酪農組合等の関係機関が一体となった防疫対策を推進したので報告する。

【材料及び方法】PI牛と診断した子牛(4頭)は、常法に従い病理学的検査、ウイルス学的検査、細菌学的検査を実施。同居牛(n=225)、新生子牛(n=27)並びに農場外に預託飼育した初妊牛(n=11)の血清計243検体を供試し、遺伝子検査(PCR法)を実施。PI牛の診断はPCR法により1回目の陽性を確認後、3週間後に再検査を行いウイルス分離と合わせて確定した。また0市管内酪農家7戸について、バルク乳を用いてスクリーニング検査(PCR法)を実施。

【症例】1. ホルスタイン種(雌)106日齢；2018年6月、難治性腸炎で予後不良と判断し鑑定殺。保存血清においてもBVDV遺伝子陽性、ウイルス分離(1b型)。2. ホルスタイン種(雌)182日齢；2018年6月、衰弱により死期切迫となり鑑定殺。2回の検査でBVDV遺伝子陽性、ウイルス分離(1b型)。

【対策及び結果】同一農場でBVD-MD発生が相次ぎ、管内酪農家に情報提供と注意喚起。併せて関係機関で以下の対策を協議・決定。

1. 発生農場のまん延防止対策；[1]同居牛の浸潤状況調査のため家畜伝染病予防法第5条検査を活用し全頭検査。[2]子宮内感染の摘発のため月1回の新生子牛検査。[3]農場外で預託飼育された初妊牛のPI牛摘発のため月1回の退牧検査を実施。以上について収束から1年を目途に継続。またPI牛の自主淘汰を農場主に確認。この結果、新たに2018年7月にホルスタイン種(雌)135日齢[症例3]、8月に黒毛和種(雄)40日齢[症例4]の計2頭を摘発し淘汰。

2. 感染対策；発生農場は、BVDVワクチンを未接種であったことから、預託牧場に入牧する牛を中心にワクチン(1b, 2a型)を接種することを臨床獣医師と打ち合わせて決定した。またワクチン助成について、市単独事業の実施を検討中。

3. 損失補填対策；PI牛発生が相次ぎ、今後1年間の発生と経済損失を7.8頭3755千円と試算。損失補填のため「家畜農場清浄化支援対策事業」の淘汰奨励金を申請、進行中。

4. 市酪農組合の取組；PI牛摘発のためバルク乳検査。外部導入や預託など侵入リスクを考慮し、検査頻度を設定。7農場7検体すべて陰性を確認し、現在も検査を継続中。

【まとめ及び考察】BVD-MD発生を契機に関係機関と連携し、発生農場及び市酪農組合のまん延防止対策を実施。その結果、発生農場で4頭のPI牛を摘発・淘汰。経済負担軽減のために淘汰奨励金による補填の対象となったが、さらなる拡充と制度の充実を望むところである。またバルク乳検査結果から、現在のところ他農場へのBVDV侵入は確認されていない。今回、一酪農家でBVD-MDが発生したが、適切なまん延防止対策を実施した。さらに関係機関が役割を分担し、地域一体となって防疫対策を推進した。酪農家を守るには、総合的な対応を行うことが重要であると考えられる。